



ご自由に
お持ち
ください

令和8年5月号



糸でんわ

vol.
187

就任のご挨拶

センター長
副院長
内科総括部長
放射線診断科部長

神崎 恒一
山本 寛
岩切 理歌
明石 敏昭

坂口志文先生
特別講演会
開催レポート



坂
口
志

看護師のおしごと図鑑
老人看護専門
看護師 編



センター長 就任のご挨拶



センター長
こうざき こういち
神崎 恒一

東京都健康長寿医療センター病院は、常勤医師約130名、非常勤医師（研修医含む）約170名、看護師約500名、医療技術者約200名をはじめ、総勢1,000名を超える職員により運営されている急性期病院です。加えて、地域の多くのボランティアの皆様にもご協力をいただいております。

当センターは高齢者に多い脳・心血管疾患、がん、認知症、糖尿病を重点領域としつつ、骨・関節疾患、腎疾患、感覚器疾患（白内障、難聴）、呼吸器疾患など幅広い分野において、充実した診療体制と専門スタッフのもと高度な医療を提供しております。また、救急医療にも積極的に取り組み、小児科および産科関連を除くほぼすべての疾患に対応しております。

さらに、PET-CT、320列CT、3テスラMRIを用いた高精度画像診断、ハイブリッド手術室による先進的治療、下肢難治性潰瘍に対する血管再生療法、遺伝子診断に基づく個別化医療、内視鏡・カテーテルを駆使した低侵襲治療など、先進医療の導入にも積極的に取り組んでおります。加えて、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）、超音波内視鏡下穿刺術（EUS-FNA）、大動脈瘤に対するステントグラフト治療、早期アルツハイマー病に対する抗体療法などの専門医療においても、症例数は着実に増加しています。このような医療を支える環境として、利用しやすい外来配置やプライバシーに配慮した診療体制、さらに快適でゆとりある療養環境の整備にも努めております。

当センターは、患者さんお一人おひとりとご家族に対し、十分な説明とご理解、同意を頂いた上で（1）質の高い医療の提供、（2）退院後の生活の質を見据えた医療、（3）地域の医療機関および各種施設との緊密な連携を柱とした医療を推進しております。また、退院に際しても、退院後の生活を円滑に営むことができるよう最大限の支援を行っております。

受診をご希望の際には、是非かかりつけ医の紹介状をご持参ください。紹介状を頂くことにより、これまでの経過や病状を正確に把握でき、より迅速かつ適切な医療の提供が可能となります。

中年期の方から高齢期の方に至るまで、皆様がアクティブで、充実した生活を送ることができるよう、日進月歩の医学・医療を取り入れつつ、安全で安心な医療の提供に職員一同努めてまいります。より多くの方々が、今後当センターをご利用下さいますよう、お願い申し上げます。

副院長 就任のご挨拶



副院長（呼吸器内科部長 兼務）

やまもと ひろし
山本 寛

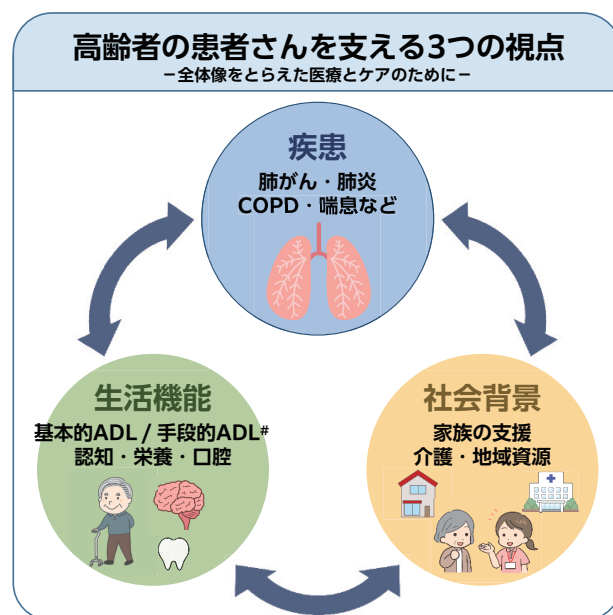
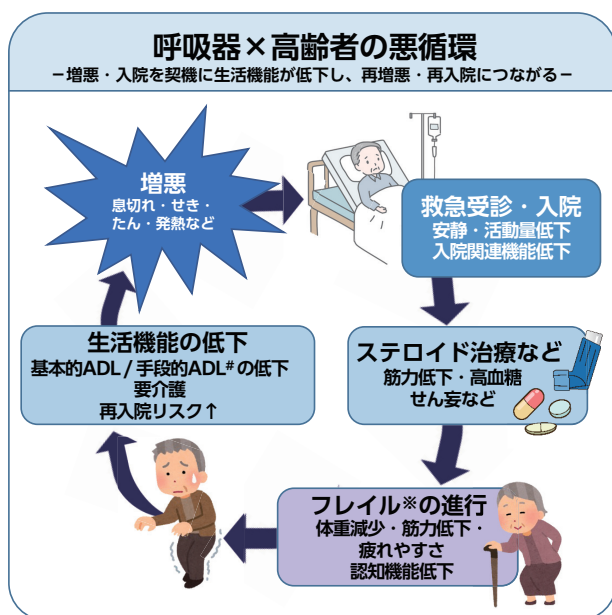
このたび、副院長に就任いたしました山本と申します。呼吸器内科を専門とし、高齢の患者さんに多い肺がん、肺炎、COPD（慢性閉塞性肺疾患）、喘息などの診療に携わるとともに、老年医学の視点から「がんをわずらう高齢者」の治療と生活機能の維持に関する臨床・研究に取り組んでまいりました。このたび原田和昌副院長の後任としてその任を引き継ぐこととなり、身の引き締まる思いであります。

高齢者の呼吸器疾患では、増悪や肺炎による救急受診・入院を契機に、活動量の低下や筋力低下、認知機能の変化が進み、生活機能の低下へとつながることが少なくありません。さらに、入院や薬物治療はこうした変化を助長し、回復を遅らせる場合もあり、このような「悪循環」に早期から気づき、断ち切ることが重要です。

左下の図はその代表的な流れを示したものです。私たちは呼吸器診療に高齢者総合機能評価(CGA)を組み込み、増悪予防、早期リハビリテーション、栄養管理、適切な薬物療法、退院支援と在宅医療との連携を一体として進めようとしています。

また右下の図に示しますように、患者さんの状態は疾患だけでなく、生活機能や社会背景と相互に密接に影響しあっています。研究で得られたエビデンスを診療や医療体制に実装し、これらを総合的に支える医療をさらに発展させてまいります。

今後も地域の先生方との連携を一層強化し、患者さん一人ひとりの「その人らしい生活」を支える医療の実現に努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



※フレイル：加齢により心身の活力が低下し、要介護になりやすい状態（日本老年医学会による定義）

#基本的ADL：移動・排泄・食事・更衣・洗面・入浴などの基本的な日常生活動作、IADL：食事の準備、買い物、家事、金銭管理、交通機関の利用、服薬管理、電話の使用といった、手段的日常生活動作

内科総括部長 就任のご挨拶



内科総括部長兼総合内科・
高齢診療科部長

いわきり りか
岩切 理歌

2026年4月より、内科総括部長を拝命いたしました岩切理歌と申します。私は2013年より総合内科に勤務し、2017年のポリファーマシーチームの発足、2020年の高齢診療科開設にも関わってまいりました。この間、地域の医療機関の先生がたより多くの患者さんをご紹介いただき、貴重な経験をさせていただきました。総合内科・高齢診療科は多疾患罹患状態の患者さんが多いことから、複数の診療科との連携が不可欠でした。これまでの経験を、内科系診療科全体に共通する課題の解決に活かしていければと思っております。引き続き地域医療への貢献に力を尽くしてまいりますので、何卒ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

放射線診断科部長 就任のご挨拶



放射線診断科部長

あかし としあき
明石 敏昭

放射線診断科部長に就任いたしました明石敏昭です。2005年に奈良県立医科大学卒業後、2011年から放射線診断専門医としておもに大学病院の画像診断業務（神経放射線専門）や研究に従事しておりました。近年では日本医学放射線学会が主導する日本医用画像データベース構築の研究事業に従事し、人工知能の開発研究にも携わってきました。医療におけるデータサイエンス技術が急速に進展する中、放射線科の役割はますます重要性を増しております。これからは臨床現場に即して従来の手法を継承しながらも、新しい技術を積極的に取り入れ、センターのさらなる発展に尽力する所存です。

第177回老年学・老年医学公開講座

今なら間に合う！フレイル予防

～カギは“動かす・食べる・つながる”～

令和
8年 **6月30日** 火
12:50～16:00（開場：12:20）

会場

大田区民ホール
アプリコ 大ホール

申込不要

入場無料

定員1,400人

手話通訳あり

老人看護専門看護師 編

老人看護専門看護師とは？

老人看護専門看護師は、高齢の患者さんが大切にされている「その人らしい暮らし」を続けられるよう、医療や生活の質を整え、からだところを支える看護師です。

「人生 100 年時代」を迎え、医療の選択が増えたいま、皆さんが「この医療やケアを受けてよかった」と納得や満足できる道を一緒に考え、寄り添います。

いつまでも元気に！「フレイル対策」

・サポートナースの育成：フレイル予防の専門知識を持つ看護師の研修をしています。

「フレイル」とは、健康な状態と介護が必要な状態の中間にあたる、からだやこころが弱まっている状態です。早めの対策（運動・栄養・社会参加・疾病管理）で元の元気な状態に戻れるため、当センターではフレイル対策に取り組んでいます。



・院内のフレイル予防のための通いの場

当センターでは、運動や交流を通じて元気に過ごせるような取り組みを行っています。

地域の方々が週に1回集まり、楽しく活動しています。



「体の困りごと」や「こころの迷い」に寄り添う、ケアの質向上への取り組み

年齢を重ねると、日々の生活の中でさまざまな不自由や不安が出てくるかと思います。

「耳が聞こえにくくて話すのが大変」「足がむくんだり、足元がふらつく」「からだが痛い」

私たちは、こうした症状を少しでも和らげるお手伝いをします。

また、治療のためにやむを得ずお体を制限（身体拘束）しなければならない場面や、これからの治療や生活に迷いや悩みがあるときには、医師や看護師、心理士、薬剤師などたくさんのスタッフで「患者さんにとって何が一番幸せか」を考えながら話し合いをしています。

患者さんやご家族の思いに寄り添い、「その人にとって一番よい医療やケア」を一緒に考え、支えていきます。

皆さまが自分らしく心地よい毎日を過ごせるよう、これからも力を尽くしてまいります。



▲多職種カンファレンスの様子

老年学・老年医学公開講座 坂口志文先生 特別講演会 ノーベル生理学・医学賞 受賞までの道のり開催レポート

自然科学系 副所長 石神 昭人

坂口志文先生は、免疫の過剰反応を抑える「制御性T細胞（Treg）」を発見し、その機能を明らかにした功績により、2025年ノーベル生理学・医学賞を受賞されました。

坂口先生は 1995年から1999年まで東京都老人総合研究所（現・東京都健康長寿医療センター研究所）の免疫病理部門長を務められ、ノーベル賞につながる基礎研究を推進されました。受賞理由の一つとなった主要論文¹⁾も、同研究所在籍中に発表されたものです。この論文では、制御性T細胞に特異的な分子マーカーを世界で初めて同定し、これらの細胞が免疫自己寛容の維持に中心的な役割を果たすことを示されました。

本講演会では、研究の歩みとともに、東京都老人総合研究所での若き日の思い出についてもお話いただきました。多数の来場希望が見込まれたため事前申込制とし、応募多数の場合は抽選といたしました。募集人数1,000人に対し、同伴者を含め約3,500人の応募があり、多くの方にご参加いただけなかったことをお詫び申し上げます。

講演会は東京都および板橋区との共催で開催されました。講演に先立ち、秋下雅弘理事長、坂本健板橋区長より祝辞とご挨拶をいただきました。また、小池百合子東京都知事からはビデオメッセージにてお祝いの言葉を頂戴しました。

坂口先生の講演では、まず研究所での思い出や大山での生活について語られました。さらに、2025年ノーベル賞授賞式（ストックホルム）の写真とともに、その様子も紹介されました。研究内容としては、「免疫寛容とは何か」「免疫寛容と自己免疫」「免疫自己寛容がどのように成立・維持されるのか」といった基本概念から、制御性T細胞の同定に至る研究の歴史まで、わかりやすく解説されました。後半では、「自己免疫疾患に対する抗原特異的免疫寛容の誘導」や「がん免疫療法への応用」など、将来の医療への展望についてもお話いただきました。

講演後の休憩時間には、参加者の皆様から質問を記入していただき、その後の質疑応答で坂口先生にご回答いただきました。限られた時間のためすべての質問には対応できませんでしたが、幼少期のエピソード、医学部進学のかきつけ、免疫と老化、制御性T細胞の臨床応用など、多岐にわたる質問に対し、ユーモアを交えながら丁寧にお答えいただきました。また、神崎恒一センター長にもご参加いただき、奥様と一緒に研究に打ち込まれた当時の様子についても伺うことができました。

最後に坂口先生から、「どんな時にも楽天的であることが大切」という、来場者および若い世代へのメッセージが贈られ、講演会は盛会のうちに終了しました。ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



1) Immunologic self-tolerance maintained by activated T cells expressing IL-2 receptor α -chains (CD25). Breakdown of a single mechanism of self-tolerance causes various autoimmune diseases. The Journal of Immunology, Volume 155, Issue 3, August 1995, Pages 1151-1164.

総務課 総務係 広報担当

東武東上線沿線のときわ台駅付近から毎日15分ほど歩いて通勤されていたという、当時を振り返る懐かしい思い出話から始まり、今回の受賞につながる重要な基盤となった当センター在籍時の研究内容にも触れられました。

質疑応答では、「体を鍛えることと同じように、頭も鍛えられる。AIに質問すれば簡単に答えが得られる時代だからこそ、自分で考え、解決していくことが大切であり、自分自身を納得させるために勉強することが重要である」と、日本初のノーベル物理学賞受賞者・湯川秀樹先生の言葉を引用した力強いメッセージが贈られました。さらに、「何事も結果が出るまでには時間がかかる。20代から始めた研究を約50年続ける中で、純粋な関心が次第に問題意識へと発展した。研究とは直接関係のない出来事がヒントとなり、前進につながったこともある。どんな時にも楽天的であることが大切である」と語られ、その言葉は来場者の心に深く刻まれました。

講演会後には、当センターをご見学いただきました。病理診断科では、当時坂口先生がサインされた解剖資料などをご紹介し、坂口先生ご夫妻も懐かしそうにご覧になっていました。その後、ブレインバンクも見学され、説明に熱心に耳を傾けておられる姿が印象的でした。

当日の講演動画は、後日センター公式YouTubeチャンネルにて公開予定です。ぜひご覧ください。

